ISSN 0910−2396

野鳥だより

−北海道−

北海道野鳥だより第138号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　平成16年12月21日

ツメナガホオジロ

2003. 1.26　鵡川町　撮影者　山田良造

〒003−0021　札幌市白石区栄通16丁目
4 −13

もくじ

私の探鳥地（49）「野幌周辺」　松原　寛直 …… 2
砂川袋地沼のカワウ　広　報　部 …… 3
浦河の野鳥　浦河探鳥クラブ代表　春田　清美 …… 4
Bird Watchingの楽しい思い出　犬飼　　弘 …… 6
ヒメウズラシギとヨーロッパトウネンの観察報告　篠原　盛雄 …… 7
山階芳麿氏の「北海道紀行」　樋口　孝城 …… 8
探鳥会ほうこく …… 10
探鳥会あんない …… 13
鳥民だより …… 14

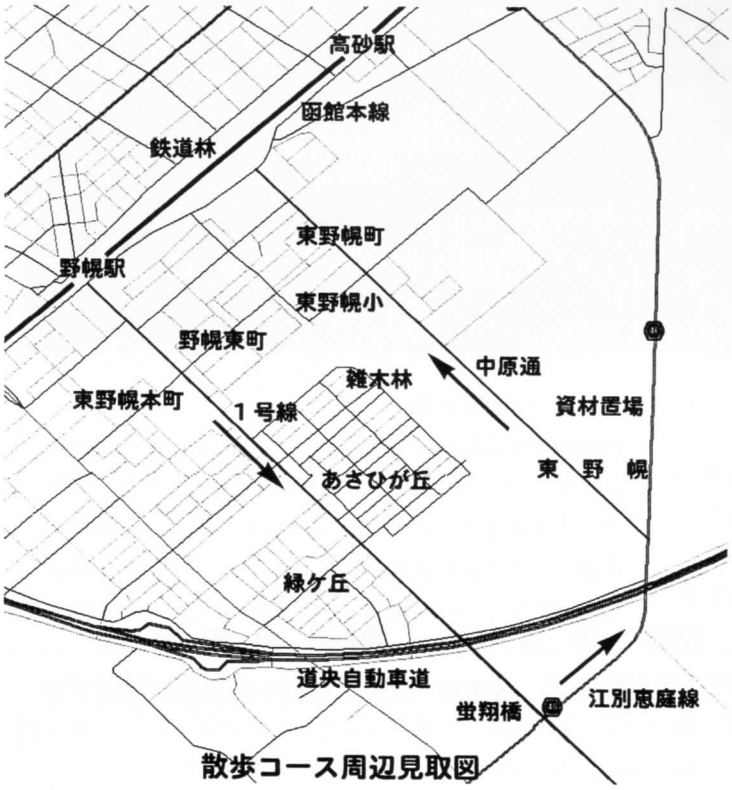
私の探鳥地（49）　「野幌周辺」

松原寛直

野幌に住んで20余年、自宅が野幌駅南口の近くにありますので、早朝の散歩がてら、また、ちょっと時間のある時に手軽に足を運んでいる探鳥地をご紹介しましょう。最大の探鳥地は大沢口から入る野幌森林公園（原始林）ですが、ここは本会の定例探鳥地であり、皆様も十分ご存知なので割愛いたします。

まず、同じ原始林の中でも登満別口から入る一周約3kmのカラマツコースの途中にある原の池です。ここは松川の池や大沢の池と異なり、まだ十分水量があり、カイツブリの子育てや、カワセミ、オシドリ、マガモ、アオサギ等々をかなりの確率で楽しむ事ができます。

また、図に示したように、野幌駅南口から1号線沿いに野幌東町、あさひが丘の住宅地を通り、江別恵庭線に出てから江別方向に向って（まっすぐ進むと南幌町に至る田畑・草原地帯となります）約1km程行き、次には通称中原通りと呼んでいる田舎道に入り、東野幌町の住宅地を抜け、旧国道（鉄東線）を南口まで戻って来る約6kmの散歩コースの住宅地の中でも、庭木にスズメ、ヒヨドリはもとより、シジュウカラ、ヤマガラ、カワラヒワ等々が姿を見せ結構楽しませてくれます。特に東野幌小学校のグラウンド脇から続く雑木林と中原通り左右（東野幌）の田畑・草原が格好の探鳥場所です。春夏秋冬を通して、本会の野幌探鳥会で顔を見せる大半の鳥たちが出現するのには驚かされます。こんな住宅地の傍でと・・・。春にはウグイスが囀り、カッコウが色気の無いことに電線や農家のアンテナに停って鳴きます。堆肥の上にはコウライキジが出て来たり、潅漑用水路をカワセミが行き来し、螢翔橋下の小川ではイソシギが遊んでいたりします。01年6月にはアマサギまで目撃しています。秋にはカワラヒワの大集団が群れ、冬にはレンジャクで賑ぎわいます。しかし残念なのは、開発行為で住宅地が延長されて来るにつれ、鳥たちの住み家が狭められ、営巣していたと思われるヒバリやオオジシギがめっきり少なくなってきていることです。



散歩コース周辺見取図

アオサギのコロニー

自宅から車で10分位の所で通称5丁目通り沿にある後藤遺跡の雑木林にアオサギコロニーがあり、毎年3月中旬頃にやって来て子育てをしておりま

す。3～4年前からは例のペリカンも姿を見せ、アオサギの巣の隣りに陣どりちょっかいを出している姿も見ることができます。すぐ下に世田豊平川が流れ、エサも豊富で、アオサギのうちには何羽か越冬するものもおります。

南幌親水沼周辺

温泉好きの方ならすぐにわかると思いますが、江別市から千歳川に架かる江南橋を渡り、南幌町に入ってすぐ左手にある南幌温泉の横に、地元の人が親水沼と呼んでいる沼があります。この3月、オナガガモの大群に混り、ミコアイサが13羽も入っているのを見つけました。私は今まで一度にこれだけの数のミコアイサを見たのは初めてなので大感激でした。

角山周辺

少し淋しいのは、豊平川と石狩川の合流点近く、角山地区の一番奥にある食肉加工場周辺で、時期になればトビの大群の中にオジロワシやオオワシの姿も見ることができたのに、加工場の操業停止？とほぼ同時ぐらいにオジロワシやオオワシはおろか、トビさえも稀れにしか見られなくなったことです。あれだけ群れていたトビはどこへ行ったのでしょうか？　また、今年の8月中旬頃には、函館本線高砂駅近くの鉄道林で営巣したのでしょうか、何度もチゴハヤブサが子連れで送電線に停っているのを目撃しました。

これまで述べたことは観察データを取ったものではなく、あくまで散歩途中の私の個人的主観であり推測であることをお断りしておきます。なお、「アオサギのコロニー」、「南幌親水沼周辺」、「角山周辺」の事例に関しては、本会会員である山口和夫氏と同行し、二人で一喜一憂しながら観察しているものです。これらの他に私が足を運ぶ探鳥地は、中津湖、越後沼、江別市を流れる石狩川、夕張川、千歳川、又街中の大麻中央公園、湯川公園、泉の沼公園等々近くに多数ありますが、詳細は後日の機会に譲ります。

最後に野鳥ではありませんが、前述の雑木林でエゾリスを見かけたり、資材置場の材木の上で子ギツネが日向ぼっこをしていたり、親ギツネが近くの農家から失敬して来たのかニワトリを銜えて畑を歩いているのを目撃したりしました。この地区はまだまだ豊かな自然が残っておりますが、最近報道されている本州のクマ問題や下北半島脇野沢村の猿害問題を見るにつけても、人々の生活権との関わり、開発行為と自然環境保護に関する問題はこれからも各地で起り得る難しい永遠のテーマだと思います。いつまでも野鳥はじめ多くの動植物が自然のままの姿を保ち、人と共生できる世界を願ってやみません。

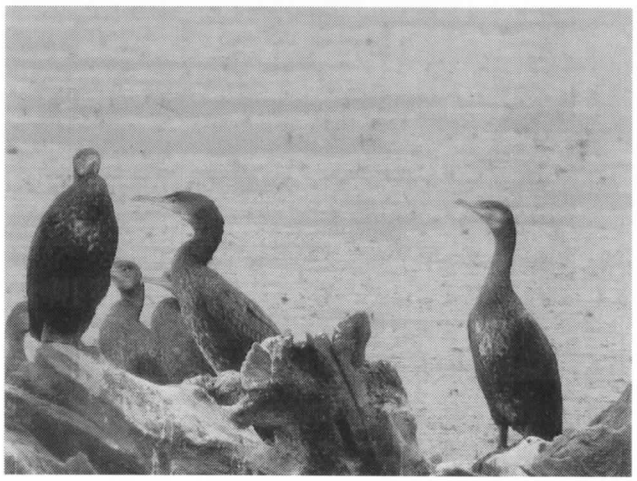
〒069－0825　江別市野幌東町5－13

砂川袋地沼のカワウ

広　報　部

2004年10月10日、本会宮島沼探鳥会が正午ころに終了した後、会員の中正憲佶さん、栗林宏三さんら約10名が、砂川市と新十津川町（いずれも空知管内）の境界の一部をなす袋地沼に向かった。マガンは全くいなく、ヒシクイ（亜種オオヒシクイ）ばかりだったが、枯れて倒れた樹上にウが10羽近くとまっていた。ここ数年、北海道でもカワウがよく見られるようになっていることから、皆で注意して観察したところ、嘴基部近くの皮膚が裸出した黄色い部分の形から、まぎれもなくカワウであるとの結論に達した。撮影された写真によっても、その特徴は十分に確認され、また、幼鳥であろうと判断された。このカワウの小群はその後まもなく飛び去った。当日の観察者の中には一週間後に再び袋地沼へ行った人もいるが、その時にはカワウは見られなかったとのことである。

かつては北海道にはいない、あるいは稀といわれていたカワウが、近年では繁殖までもするようになっている。本州での漁業被害や糞害などを考えると、北海道のカワウの今後の動向に十分の注意を払わなければならないだろう。



カワウ　2004年10月10日　袋地沼

浦 河 の 野 鳥

浦河探鳥クラブ代表　春 田 清 美

日高地方は太平洋と日高山脈にはさまれた、川によって作られた平地および丘陵地に牧草地の広がる、実に牧歌的な風土です。鳥見人口は決して多いとは云えず、北海道の鳥類リストや目録を作るとき、記録の少ない地域の一つです。浦河町立博物館が博物館友の会と協力して毎年春・冬に探鳥会を開く様になり、野鳥観察愛好者の輪が広がり出しました。中村廣治教諭が学校公開講座「野鳥観察講座」を実施し、町民と野鳥観察の楽しさを共有し、そこから「月例探鳥会」が生まれ、そして2001年１月14日「浦河探鳥クラブ」が結成されました。以後、毎月探鳥会を行い、現在に至っております。会員は2004年10月現在で32名、年４回会報を出し、野鳥記録も200種を超えてきました。2004年６月には珍鳥クロツラヘラサギが観察され、多少なりとも注目されてきた浦河の野鳥について探鳥会のフィールドから述べてみたいと思います。

日高幌別川

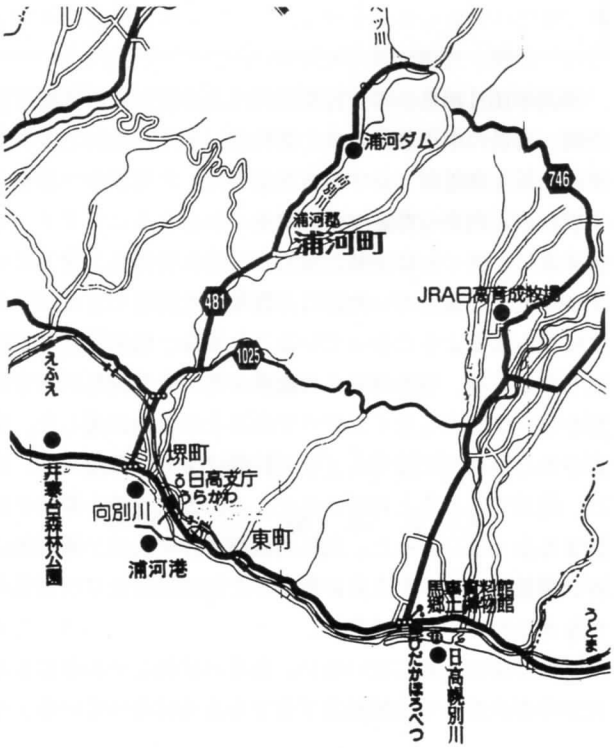
二級河川である日高幌別川河口は、定例探鳥会のフィールドであり、ここでクロツラヘラサギも観察されました。冬にはオジロワシ、オオワシが河口から約10km上流までの両岸の大木に飛来し、11月下旬から12月中旬のピーク時には70羽近くが集まります。どうも移動中の中継地に使われているようで、越冬個体は30羽前後ですが、その姿は勇壮です。比率はオジロワシよりオオワシの方が多いです。昨年冬はタンチョウも２羽飛来し、眼を愉しませてくれました。川にはオオハクチョウもやってきます。

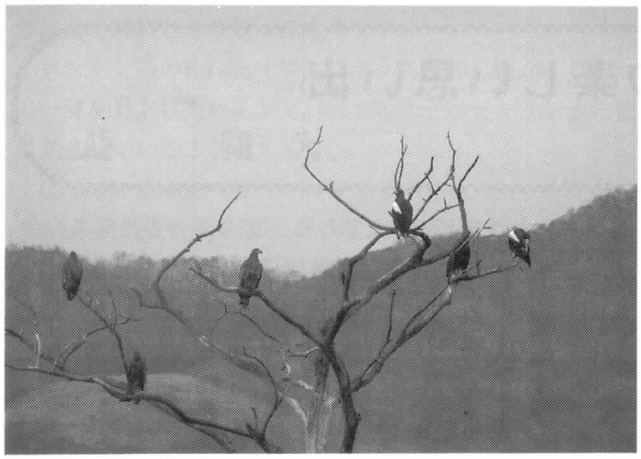
河口では一年を通して淡水ガモ、ウミガモが観察されます。オシドリは繁殖しており、銀杏羽の時期もエクリプスも観察されます。カモ類への観察距離が近いのも魅力です。カワセミも身近に観察できます。カワラヒワやハクセキレイ、セグロセキレイ、秋口からはキセキレイも混じり観察されます。カモメ類はオオセグロカモメ、セグロカモメ、ウミネコ、カモメ、ユリカモメ、ミツユビカモメが普通で、冬にワシカモメ、シロカモメが混じります。アジサシ類はまれに混じる程度で過去にアジサシ、クロハラアジサシの記録があります。また、北海道では過去に記録がないベニアジサシとみなされる鳥も見たことがあります。たたんだ翼の先より尾の先端の方がずっと長かった点が顕著で、くちばしもアジサシより長め、背の色も薄く、私自身はベニアジサシと判別しました。でも、証拠となる写真がないのが残念です。サギ類はアオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギが見られます。日高地方には干潟が無いため、大きな川の河口にシギ、チドリが飛来します。数は少ないのですが毎年春と秋には数種類が観察されています。その中でもセイタカシギは長く赤い足で私たちを魅了してくれます。

河川敷の草原では、ヒバリ、ノビタキ、オオジュリン、コヨシキリ等が繁殖しています。この草原は海岸線沿いに広がり、冬になるとそこでコミミズクやハイイロチュウヒが観察できます。河口上空ではハヤブサやオオタカ、ハイタカ等猛禽類もよく見られます。

JRA（旧種畜牧場事務所跡地）敷地内

木々の繁るこの場所ではアカゲラ、ヤマゲラ、コゲラ等キツツキ類が観察されます。シジュウカラ、ハシブトガラ、ヒガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、エナガ、イカル、シメ、コムクドリ、アオバト、キジバト、カケス、ヒヨドリ、ビンズイ、マヒワ、エゾヒタキ、サメビタキ、コサメビタキ等、小鳥類も多く、上空をハチクマやクマタカが舞う事もあります。冬には低い松の中や下でキクイタダキの姿が観察されます。





オジロワシとオオワシ2003年12月　日高幌別川流域

日高幌別川下流、中流域の牧草地

オオジシギがにぎやかにディスプレイを行う牧草地には、冬になるとマガン、ヒシクイ（亜種ヒシクイ、亜種オオヒシクイの両方）が少数飛来することがあります。昨シーズンの冬にはマガン幼鳥２羽に混じってカリガネ幼鳥１羽も観察されました。日高地方へのガン類の飛来や越冬は、近年の地球温暖化ともむすび付けられ考えられています。

井寒台森林公園

浦河駅の西北約1.5km、標高が109ｍの丘陵地が浦河森林公園とも呼ばれる井寒台森林公園です。歩道があり、広葉樹の種類も豊かで多くの鳥を見ることが出来ます。林床には春になるとエゾエンゴサク、カタクリ、ニリンソウ、オオバナノエンレイソウ、シラネアオイなど野草が乱れ咲き、昔の北海道の野原や林の風景を残しています。特に５、６月は渡って来た夏鳥がにぎやかに囀ります。オオルリ、キビタキ、コルリ、クロツグミ、ウグイス、センダイムシクイ、ヤブサメ、カッコウ、ツツドリ、アカハラ、アオバト、イカル、シメ、コムクドリ、メジロ、クロジ、ニュウナイスズメ、カラ類など、道路や林縁ではアオジ、ヒバリ、モズ、ノビタキ、ホオジロ、カワラヒワ等が見られます。近くの牧草地ではオオジシギのディスプレイも聞こえます。クマゲラやフクロウもまれに観察されます。

浦　河　港

冬の観察が愉しい所です。シノリガモ、クロガモ、コオリガモが見られ、海が荒れた時まれにビロードキンクロも観察されます。2004年３月にはコクガンも観察されました。数は少ないながらウミスズメ類やカイツブリ類、アビやオオハム、ウミガラスも観察されます。

向　別　川

小さな川ながら小鳥とカモ類が愉しめます。人家がすぐそばにありながらカワセミが近くで観察でき、冬にはミソサザイやジョウビタキを観察できます。ジョウビタキの越冬は私たちが観察を始めた1990年代からは毎年確認されています。ベニマシコやアトリ、ハギマシコ、レンジャク類も見られます。

浦 河 ダ ム

オシドリが観察される場所です。町民のいこいの場になっているので、野鳥の観察には距離が少しありますが、過去にミサゴやカワウも観察されています。

浦河町は冬も雪が少なく暖かい土地なので、暖冬の年にはヒバリが越冬したりメジロが寒くなっても観察されたりします。全体としては道内で見られる野鳥が同じく観察されるのですが、十勝地方と比べると、低地でノゴマが少なくシマアオジの観察例がありません。これは河川の近くまで牧草地化され、自然草原がほとんど無いためです。

また海に面しているので海上の鳥はかなりいると思われるのですが、普通の観察ではあまり見ることが出来ません。迷鳥としてクロアシアホウドリの記録があります。この例からも考えられますように本州以南で見られる野鳥の迷鳥記録は今後も増えるものと思われます。

日高山脈に関しましては、山が急峻で奥深いため、普通に観察は出来ません。佐田正行氏の『日高山脈（北部・中部）鳥類調査報告書』（2004年４月）によっても、標高の高い所ではノゴマ、ビンズイ、カヤクグリなど、鳥の種類は多いほうではないようです。

コクガン　2004年３月　浦河港　丹波幸二氏撮影

最近、浦河町および日高地方で野鳥観察を趣味とする人が増えて来ているようなので、今後も観察記録は増えていくものと期待できます。私たち浦河探鳥クラブも愉しみながら野鳥を愛(め)で記録をとっていきたいと思います。

〒057－0002　浦河郡浦河町西幌別273－１

Bird Watching の楽しい思い出

犬飼　弘

1985年3月初版のKaiko Ken's Naturalist Books「バードウオッチング」の巻頭言で開高健がバードウォッチングという言葉もナチュラリストとならんで急速の流布され浸透し、定着するようになったので・・・」と述べ、また、同書のあとがきの解説で日本鳥類保護連盟主管の柳澤紀夫氏が「バードウォッチングはイギリスが発祥の地であり歴史も実績もある。沢山の人が興味、理解をもち、国民の生活のなかに根付いている。・・・　日本ではバードウォッチングが広がってきたのはつい10年ほどのことである」と述べている。

北海道野鳥愛護会が誕生したのはたしか1970年である。

さて、バードウォッチングはイギリスが大先輩であることはいろいろな事情から考えてはっきりしているように思われる。

bird は、

1．鳥
2．game bird（猟鳥）
3．特に目立った特徴・性質を持っている人
4．飛行機
5．ロケット
6．若い女性
7．They gave him the bird.（ひやかし）
8．He got the bird.（彼は首になった）
9．bird like（鳥のようにすばやい）
10．bird man（鳥類研究家、飛行家）
11．birdieは幼児語で小鳥ちゃん、またゴルフ用語でもある。
12．Watch the birdieは（こちらを見て）と写真をとる時のかけ声となる。

'89年夏20日間に亙ってイングランド、ウエールズそしてスコットランドへの文学の旅、'96年春の香港探鳥の会、'99年春のオーストラリア東海岸探鳥の旅を想起しながら英語鳥名のthis、or thatを楽しんでみたいと思います。

名誉ある1番手に指名されたのはAlbatrossの名のアホウドリさん。AlbionはGreat Britain島の南部海岸をDover海峡上から眺めると白亜質の絶壁が白く見えることに由来している。アホウドリなんて名を返上し古式名の信鳥とか信天翁または英語名そのままShort-tailed Albatrossそしてクロアシアホウドリの方はBlack-footed Albatrossと呼んでやりたい。

イギリス、アメリカといえばMother Gooseはさけて通れないが、深みにはまったらたいへん。軽くふれるのがよいようです。Gooseは諸説があるがgos-gha-gape（大口を開ける）→gooseとなったらしいのです。

call a goose a swan（黒を白と言いくるめる）、cook a person's goose（人の熱意をくじく）、The old woman is picking her goose（ガチョウの羽をつんでいる）→雪がしきりに降っている。

Goose, Goosey, Gander（ガーガアガチョウさん）や、Sing A Song of Six pence（6ペンスの唄をうたおう）にはblackbirds（クロウタドリ）が出てくる。

鳥は唄いこまれていないが、Twinkle, Twinkle Little Starや、London Bridge is Broken Down、My fair lady

Vulturine Guineafowl フサホロホロチョウ（キジ科）
2000年8月、ケニア、吉野一郎氏撮影

Martial Eagle ゴマバラワシ（タカ科）
2000年8月、ケニア、吉野一郎氏撮影

等は良く耳にしたり歌ったものです。

ロンドン塔のRaven（ワタリガラス）やCanada Gooseの一隊を見かけたハイド・パークのサーペンタイン池の秋は深まっていることでしょう。

Greater Coucal（オオバンケン）

coucal [ku:kəl]バンケン：ホトトギス属（フランス語のCoucouからきたらしい）。米埔MAI PO（香港の自然保護区）で確認された69種の他は忘れても、玉虫色の黒地に赤褐色の大きなベストをふわっと着こんでいたおしゃれ者には参った。

Sulphur-crested Cockatoo（キバタン）。シドニーの王立植物園は鳥影あれど人影まばら。黄色の長いとさかに俄小雨があたった。そこは秋だった。勿論Latham's Snipe（オオジシギ）の声はなかった。

スケートシーズンになると真駒内オープンスタジアムのリンクでカメラマン吉野一郎さんによくお会いし、鳥について貴重なお話をうけたまわり、なおすばらしい写真をいただくこともある。同氏がケニアで撮影された2枚をごらん下さい。同氏からケニア行きのお誘いのお話もあったのですが、都合がつかず同行できませんでした。

〒062－0922　札幌市豊平区中の島2条5丁目10－7

ヒメウズラシギとヨーロッパトウネンの観察報告

篠　原　盛　雄

今年（2004年）は春の時点から鳥の渡りが2週間ほど早めでしたが、シギ・チドリの南下も2週間ほど早いようでした。伊達（北海道胆振管内）では7月中旬からトウネンの成鳥の南下が始まり8月中旬はシギ・チドリの渡りのピークとなりました。伊達市長流川河口周辺、有珠海水浴場が主な渡りの中継地ですが、今年は例年よりさまざまな種類のシギ・チドリが観察されました。

＜ヒメウズラシギ＞

8月15日の午前10時半ころ、長流川河口にある北海道糖業の製糖工場の廃水貯水池に時々シギ・チドリがやってくるので次男（大学2年生）と一緒に観察に行きました。この貯水池は夏場使用されていないため干潟状態になり、以前からトウネンなど観察されていました。この日はハクセキレイが17羽、トウネンが2羽、ヒバリシギが1羽、それと、トウネンよりも2回り大きく見慣れないシギが1羽いました。次男が「ヒメウズラシギだ！」と叫びましたので、私も初めての鳥でもあり、車に戻って、3～4冊の野鳥図鑑を持ってきてフィールドスコープで念入りに観察しました。顔は白い眉班がはっきりして、オジロトウネンのように頭部から胸まで灰褐色で、背面は灰褐色で鱗状班が目立ちました。足は短めで、特に、初列風切が尾羽の後方にかなり長く出るという、この種の特徴がはっきりと認められました。2羽のトウネンと一緒に餌採りをしていましたが、トウネンと比べると初列風切が長い分2㎝ほど大きく見えました。嘴はトウネンより少し長めに見えました。どの点から見てもヒメウズラシギに間違いないと次男と確認しあいました。

40分ほど観察して帰ろうとすると、次男が「お父さん写真撮ったほうがいい！」と言います。距離は20mほどあり、小さい鳥なので、1,000㎜の安いレンズでは無理かもしれないと思いつつカメラをセッティングして20枚ほど撮ってみました。やはり何とか特徴をつかめる程度の写真の仕上がりでした。後から北海道野鳥愛護会に照会してみたとこ

ヒメウズラシギ

ヨーロッパトウネン

ろ、北海道ではこれまでに鵡川、紋別、根室などで記録があることになっているが、記録写真は初めてではないかとのことでした。そうであったのならもっとまじめに努力して鮮明な写真を撮るのであったと思っても後の祭りでした。

その後忙しく8月21日に観察に行ったときには既にその姿はありませんでした。その代わりオジロトウネン1羽、アオアシシギ4羽、キリアイ1羽、ヒバリシギ1羽、タカブシギ3羽が池の干潟で餌採りをしていました。その後9月中旬製糖工場の準備作業が始まり池に水が張られるまで上記のシギ以外にエリマキシギ、オグロシギ、ソリハシシギ、クサシギ、ハマシギ、タシギなどのシギたちが入れ替わり立ち代り毎日やってきていました。

＜ヨーロッパトウネン＞

今年の8月は例年に比べていろいろな種類のシギ・チドリが観察されるので暇を見つけてはまめに観察にでかけました。8月29日の午前9時半ころから有珠海水浴場でトウネンの群れを観察していたところ、一見ヒバリシギ風な個体が1羽、50羽のトウネンの中で目を引きました。ヨーロッパトウネンかもしれないと、午前中いっぱいかけて写真と観察を続けました。全体にトウネンと比べて明るい茶色の印象を受けました。白い眉班が明瞭で、目の上あたりで2分していました。また、雨覆と三列風切が黒色で羽縁の赤褐色味が強く、背と肩羽の境界の白線がV字型にはっきりしていました。持っていた野鳥図鑑で詳細にわたってチェックしてヨーロッパトウネンの幼鳥に間違いないと確信しました。なお、後日、山科鳥類研究所の茂田良光さんに写真を見てもらい、確認をいただいたことを付け加えておきます。

ヨーロッパトウネンが含まれるトウネンの群れは幼鳥でしたので、警戒心はなく2～3mの距離で撮影と観察を続けることが出来ました。至近距離での撮影でしたので鮮明な写真を100枚ほど撮影することが出来ました。ヨーロッパトウネンはトウネンと一緒に行動していてチョコチョコ動き回るのですが、見失ってもすぐ見つけることの出来るほどはっきりと区別することができる鳥でした。

その後は仕事の関係で連続して観察することはできず、9月4日観察に出かけましたが、42羽いたトウネンの中にヨーロッパトウネンの姿を見つけることはできませんでした。10月2日まで有珠海水浴場には入れ替わり立ち代りトウネンの群れがやってきましたが、やはりヨーロッパトウネンは見られませんでした。

8月15日以前は海水浴客で賑わいますが、それ以降はシギ・チドリの中継地となっています。今年そのほかここで観察できたシギ・チドリはダイゼン、メダイチドリ、ホウロクシギ、キアシシギ、イソシギ、ムナグロでした。

〒052－0021　伊達市末永町97－83

山階芳麿氏の「北海道紀行」

樋口孝城

日本の鳥類学の拠点の一つとして知られる山階鳥類研究所（千葉県我孫子市）は、故山階芳麿氏が昭和7年（1932年）に私費を投じて私邸（当時は東京都渋谷区）に建てた鳥類標本館が前身である。その山階氏が4分の3世紀（75年）前の夏に約40日間にわたり北海道旅行をし、その折に観察した野鳥について日記風に記したものが、当時の日本鳥学会誌「鳥」第6巻 第29号（1930）に掲載されている。全文をそのまま載せて読んでいただくのがもっとも良いのであろうが、紙数などの関係から、ここでは、その中から当時ならではという野鳥をとりあげるとともに、往時の野鳥観察、野鳥研究をめぐる状況などを紹介したい。以下、『　』は引用部分である。実際のものは縦書きであるが、ここではすべて横書きにしている。また、旧漢字は現代の漢字に置き換えてある。

まずはタイトルおよび書き出し部分である。

論説　北海道紀行（夏季の鳥界瞥見）

侯爵　山階　芳麿

『余は本年夏季北海道を旅行した。左に掲ぐるは其の際の日記の抜粋である。北海道は古くはブラキストン其の他によつてよく紹介された處であるが、近来殆ど鳥界に就いての報告を聞かない。此の文は単に余の一回の旅に目に着いた處を記するに止まるが、最近の北海道の鳥界を知るの一助ともならば幸である。』

山階氏は明治33年（1900年）生まれであるから、この時にはまだ29歳であった。正直なところ、この年齢にまず驚かされる。当時において、皇族に列し、20歳で侯爵を授爵された人がどのような状況にあるかは、私の想像外である。

日記風紀行文は、『昭和4年7月13日午後一時上野駅発北海道視察の途に登る』から始まっている。途中、松島などに立ち寄り、函館港に入ったのは15日の午後10時であった。もちろん青函連絡船で津軽海峡を越えて来られたのである。

『道畜産課の古館氏態々桟橋迄迎へて下さる。夜は湯川温泉に泊まる』というところから北海道での野鳥観察紀行が始まる。交通機関は列車（国鉄）であるが、行く先々で

は現地の人が用意した自動車も利用している。

7月16日に正午に苫小牧に向かい、以後25日まで、苫小牧をベースとして、登別、支笏湖などを回っている。

7月17日『午後国道を苫小牧川口迄視察に行ったが、此の辺の原野には「ノビタキ」と「シマアオジ」とが多く両種共巣立ち間もなき雛を採集する事が出来た』、『午前古館氏と土地の狩猟家福元冨太郎氏と共に旅行の計画について相談したが・・・』

75年前には、苫小牧川河口は原野そのものであったであろうから、シマアオジがたくさんいたのも当然かもしれない。それよりも、「雛の採集」、「狩猟家との相談」というのが興味深い。卵、雛（幼鳥）、成鳥などの採集は当時の鳥類調査の基本であり、それらによって得られた知識の蓄積が現代の鳥学の基礎を支えているのであろう。

7月20日『午前11時発の森林鉄道にて支笏湖に行く。（中略）午後2時湖畔に着いた。此處に森林の事務所と王子製紙の倶楽部とがある。』以後、24日に苫小牧に戻るまで、この倶楽部に泊まり、支笏湖周辺の調査を行っている。記録された鳥のほとんどは現在でも見られるものであるが、この間の日記から興味深い部分をあげてみる。

まず、『（千歳川を）下る事約二百米にて突然河岸の熊笹の間より「アカセウビン」が飛び出した。直ちにそれを採集したが・・・』というくだりでは、正直なところ狩猟家の腕が余程にいいのか、あるいは当時のアカショウビンはのんびりしていたのだろうか、などと余計なことを考えさせられてしまった。

また、『恵庭山の南麓に舟を着け原始林中を中腹に分け入った。「エゾヤマドリ」の雛を採集する為めである。併し此の目的は達せられなかった。』とあり、この「エゾヤマドリ」とは何だろうかという疑問が生じたが、幸い学名が添えられており、エゾライチョウであることがわかった。

もう一つ、『丸駒の温泉の主人が今春湖畔にて銃獲したと云う「オジロワシ」と「シマフクロウ」との皮を寄贈して呉れた。』という部分では、オジロワシはともかく、シマフクロウが少なからずいたことが想像される。また、「皮」とは何だろうか、剥製とは違うのだろうかという疑問が生じる。

7月24日に支笏湖から苫小牧に帰り、翌25日朝に苫小牧発、岩見沢を経由して旭川に行く。旭川は宿泊だけで、すぐ26日午前9時に釧路に向かっている。狩勝峠を越え、十勝平野を横切って釧路に着いたのが午後8時。途中どこにも立ち寄った形跡がないところから、旭川から釧路まで11時間の長旅である。釧路には8月1日まで滞在し、その間、近郊を回っている。

釧路では初めの2日間ほど休養してから、7月29日には達古武湖（沼）、31日には塘路湖に行っている。カモ類を初めとする各種の水鳥の名があげられているが、その中には特別のコメントもなくオオヨシゴイのような、現在ではめったにみられないものもある。

7月30日には釧路中学校の標本室を訪れている。数ある標本中では、釧路郊外の鳥取村で大正14年12月に採集された「ハゲワシ」が珍しかったとのことである。このハゲワシは現在では正式和名「クロハゲワシ」となっている。

8月2日に釧路を出て、小清水などを経由して網走に行っている。3日間の休養後、6日に網走川と網走湖をモーターボートで回っている。記載された鳥の中で現在ほとんど観察されないものとしてはヨシゴイがあげられる。網走での観察はこの1日だけであるが、鳥の「採集」、ショウドウツバメの巣の調査も行っている。さて、いったいどれだけの人が同行していたのであろうか。

8日午前、汽車にて斜里に行く。『十一時斜里着、直ちに役場に行く。此處にも予の為に標本と飼鳥の展覧会が催されて居る。』ということでわかる通り、行く先々で既に山階氏を迎える準備ができていたのであろう。ちなみに、この地での標本は、シロエリオオハム、クマタカ、シマフクロウ、オオコノハズクなど20数種類ということであるが、それよりも興味を引かれるのは「飼鳥」である。当地在住の西澤寅吉氏という人の出品で、クロツグミ、アカハラ、シロハラ、コマドリなど20種以上、いずれも付近で採集されたものとのことである。現在では飼鳥というとペットショップのものしか考えないが、当時は野生のものを採集して飼育することが随分と行われていたようである。

斜里から網走に移動し、10日午前9時半に網走を発ち、オホーツク海から汽車で興部を経て、名寄に着いたのが夜9時である。名寄周辺ではイワツバメについての記載があるだけで、翌11日正午には名寄を発ち、夜に札幌に到着している。『停車場には小熊博士、道畜産課の齋藤氏なども出迎えて下さった』とのことである。

8月14日『午前八時小熊博士其の他と自動車にて野幌国有林を視察に行く。白老村に達すれば国有林は石狩平野に島の様に浮いて見える。九時半林業試験場に着、直ちに試験場の相澤、廣田両氏等の案内にて林内を一巡する。』

上記文中に「白老村」とありとまどったが、野幌の歴史に詳しい方々に尋ねたところ、どうやらこれは「白石村」の誤りだろうという結論になった。

野幌国有林で見られた鳥はカラ類、キツツキ類が大部分のようであるが、次の部分が当時を偲ばせる。

『予は支笏湖で「アカセウビン」を見て珍しく感じたが本日も林内にて五羽の一群を見た。多分雛連れのものであったらう。博物館の市川氏は植物園にも毎夏渡来すると語られた。夏季普通に見らるるものらしい。』

ここでいう植物園とは北大植物園のことであるが、もちろん現在の植物園とその周りを思い浮かべてはならない。ともかくもアカショウビンが普通に見られる光景を想像す

るのみである。

札幌滞在中は、札幌神社参拝、博物館での標本調査、野幌国有林調査の他に、農事試験場、養狐試験場、真駒内種畜場、月寒種羊場など、訪問、見学に忙しかったようである。

8月18日に函館に向かう予定が豪雨のため一日遅れ、19日午前8時に札幌を発ち、午後4時半に函館着。湯川温泉泊。

8月20日『午前八時連絡船にて出港、四十日の思ひ出深き北海道を後に青森に向ふ。(中略) 正午青森着。直ちに急行に乗り換へ一夜を車中に明かして上野に着いたのは八月二十一日午前七時である。』

かくして氏は北海道旅行を終え、最後は『久方振りに家に帰ると庭には既にツクツクボウシの声が仕切りであった。』と結ばれている。

山階氏の論説を紹介するにあたり、当初のもくろみは昭和4年の北海道の野鳥状況を紹介し、古今の比較をしてみようとするものであった。しかしながら、実際には野鳥状況そのものにではなく、それに関連する事どもに多くの興味が引かれた。様々な社会的変化を内包する75年を経て、自然状況、野鳥状況が大きく変化しているのは当然であろう。だが、たとえば鳥獣保護法の改定などを通して、野鳥に関わる人たちのあり方もまた同じように大きく変わっている。私にとって、この論説は「野鳥を取り巻く社会」の古今の比較という意味においても極めて興味深いものであった。

〒002－8065　札幌市北区拓北5条2丁目10－17

春の宮島沼

2004. 4.25

島　田　陽　子

開始早々、季節はずれのアラレが降るという生憎の寒い日でした。一時、会館に避難するほどでしたが、間もなく天候も回復し湖畔での探鳥会が始まりました。

「今朝のマガンは4時35分頃、一斉に（採餌のため）飛び立ちましたよ」と早朝から来ていた方の話を聞いて、昨年の今頃、主人と夜明けの宮島沼に来た時のことを思い出しました。マガンが鳴き交わしながら順番に飛び立ち、少数の群れとなり、頭上を羽音を立てて飛んで行く壮大で感動的な光景でした。

いつもならマガンでいっぱいに埋め尽くされた中から何がいるのか探し出すことが、大変でもあり面白いところなのですが、今日は、採餌から戻ってきてない様で、沼はマガンが少なく「閑古鳥？」。寂しい位見通しが良く、ハシビロガモ、キンクロハジロ、マガモ、アオサギ、ヒシクイ、オナガガモ、コガモ、ヒドリガモ等が散在していました。

ノビタキの囀りに姿を探してみると、後ろの高い木のテッペンにいました。「ノビタキは草原の鳥で、低い草地にいる」という今までのイメージがくずれた様な…。とまっていた場所の意外さが面白かったです。

もう間もなく、マガンの遠く北への渡りが始まります。「元気で無事に目的地まで行ってね!!」と思わす応援したい気持ちでした。

〒002－8072　札幌市北区あいの里2条6丁目3－3－806

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ハジビロガモ、キンクロハジロ、カモメ、オオセグロカモメ、ヒバリ、ヒヨドリ、ノビタキ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス　以上　25種

【参加者】岩﨑孝博、岡田幹夫、小川秀子、蒲澤鉄太郎・則子、小堀煌治、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、徳田恵美・和美、戸津高保・以知子、田中哲郎、高橋良直、原　美保、濱野由美子、樋口孝城、広木朋子、藤澤　豊・由美子・春信、山口和夫、山田良造、山田登志恵、山本和昭、松原寛直　以上　27名

【担当幹事】小堀煌治、樋口孝城

鵡川河口探鳥会に参加して

2004. 8.22　笹　森　繁　明

縁があり今年7月に入会させて頂き、早速、鵡川河口探鳥会に参加しました。人生で初めての探鳥会参加なので、自宅を出発する際、「探鳥会で鵡川に行ってくる」と家族に告げました。ところが家族から、「タンチョウ会が鵡川でも行われるの？」と言われる始末でした。

現地に到着すると、初秋の青空とそよ風が私を迎えてくれました。数日前の大雨の影響で、進路先方は冠水のため進入は途中までとなりましたが、有意義に過ごすことができました。以下、初心者の正直な感想などを述べさせてください。

水面にポールが並び、浮きも見えたので「漁網が入っているのですか？」と尋ねました。「水底の泥を調査研究の関係で、位置の目印です」と教えて頂きました。

「トンビ」を見つけたので、声を掛けると、「正式鳥名は『トビ』です」と教えて頂きました。

双眼鏡で「アオサギ」と見えたので、声を掛けました。すると、「『アオサギ』のように見えるが、流木です」と教えて頂きました。スコープ覗きをさせて頂いたらその通

りでした。私は早速、「『ウソ（嘘）』と分かったので『サギ（詐欺）』でしょう」と駄洒落を言いました。

遠方の小鳥を双眼鏡で鳥名確認するのは難しく、何回もスコープ覗きをさせて頂きました。自分専用を用意する必要があると、痛感しました。

散会前の集合で、「野鳥チェックリスト」の結果報告が行われました。私が気付かなかった鳥名が多数、報告され、特に「オジロワシ」がいたとは驚きです。自己の観察力不足を痛感しましたが、懲りずに今後、各探鳥会に極力、参加させて頂きたいと思っています。

〒063－0012　札幌市西区福井６丁目14－11

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、オジロワシ、ウミアイサ、タカブシギ、ソリハシシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、アジサシ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、オオジュリン、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガワス　以上　23種

【参加者】五十嵐加代子、板田孝弘、氏家正毅、岡田幹夫、荻野裕子、小山内恵子、片山　實、片山慶子、亀井厚子、蒲澤鉄太郎、蒲澤則子、岸谷美恵子、後藤義民、小堀煌治、小西芙美枝、小山　滋、小山直子、今　光江、笹森繁明、佐藤幸典、白田　築、品川睦生、新城　久、髙栗　勇、武田由里子、武田雄太、千葉、千葉、戸津髙保、中正憲佶、原　芳明、原　美保、樋口孝城、藤谷節子、松島雅之、松原寛直、松原敏子、村上トヨ、山田良造、山本和昭、山本昌子、鷲田善幸　以上　41名

【担当幹事】佐藤幸典、樋口孝城

『鵡川河口での探鳥会』に参加する機会を得て

2004. 9. 5　髙　林　和　宏

今回、私は夏季休暇を利用し、知床・野付・根室の各半島を巡るスケジュールを立て、双眼鏡を買い求めました。今迄、観光地などにある望遠鏡、又は簡単なオペラグラスを覗くことはあっても、双眼鏡を覗くことなどありませんでした。それが今回、双眼鏡を買い求めたことにより、その扱いに少しでも慣れる為、７月中旬、西岡の水源池公園に行き、双眼鏡をぶら下げウォッチングをしていた処、そこで戸津先生にお会いしたのがキッカケでした。事情をお話しした処、いま野鳥愛護会の副会長をされておられ、毎月定例で探鳥会を開催しているから参加してみないかと声を掛けて頂きました。野鳥愛護会・探鳥会とは、耳にしたことはありましたが、活動内容などは知らず、意識したことも有りませんでした。しかし、活動年数・会員数さらに30年誌発刊のことなどをお聞きし、若干興味を持ち、まずは一度参加させて頂くことにしました。

前書きが長くなりましたが、探鳥会開催の日程をお伺いし、今回の鵡川探鳥会の集合場所へ赴きました。天候は、ほとんど晴れ、汗ばむくらいの暑さでしたが、役員の方の挨拶・説明後、早速、河口へ足を進め始めました。双眼鏡は目的地に着いてから覗くものと思っていましたが、会員の方が移動しながら覗き、また望遠鏡を覗き探鳥をしながら移動されるのに、まず自分の無知を思い知らされました。そんな中、立ち木で羽を休めているアオサギ、あるいはシギ・オオジュリンなど名前を教えて頂きながら大小種々の鳥を、望遠鏡で見せて頂きました。説明を伺うと鳥の習性を把握し探鳥しているのだと、また一斉に飛び立つと、猛禽類の鳥が来たのではないかなど、色々な状況を想定しながら探鳥・観察していることに対し、大変、感銘致しました。

午前中、約３時間の探鳥終了後、参加者による探鳥の確認が行われました。当日30種の野鳥が確認された中、私が確認できたのは、望遠鏡で見せて頂いた鳥、あるいはスズメ・カラスなども含め10種類程度でした。

しかし、望遠鏡で見せて頂いた大型の鳥、あるいは姿は分からないものの鳴声だけが聞こえる鳥、更に、探鳥会で長く活動されている方でもあまり見ることの出来ないハヤブサの水浴びなど、とても貴重な時間を過ごすことが出来ました。これを機会に、今後も探鳥会に参加させて頂き、色々な鳥を観察することが出来ればと思っております。

追記；いま思えば根室から札幌へ帰る途中、風連湖手前の温根沼大橋付近で、ツルが一斉に飛び立ったように見えた沢山の鳥は、車窓からの一瞬でよく分かりませんでしたが、きっとアオサギだったのだろうと瞑想しているところです。

〒004－0065　札幌市厚別区厚別西５条２丁目２－17－39

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、チュウヒ、ハイタカ、オオタカ、ハヤブサ、マガモ、メダイチドリ、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、イソシギ、トウネン、ハマシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、コヨシキリ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト　以上　30種

【参加者】石田典也、板田孝弘、岡田幹夫、門村徳男、上出久雄・芳子、岸谷美恵子、北山政人、後藤義民、小西芙美枝、笹森繁明、佐藤幸典、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋良直、髙林和宏・智子、田辺　至、戸津髙保・以知子、富川　徹、濱野由美子、広木朋子、柳川　巌、村上トヨ、山田良造、鷲田善幸、渡辺則子　以上　30名

【担当幹事】富川　徹

野幌森林公園探鳥会

2004. 9. 12

台風のため倒木がひどく、森林内に入れないため、探鳥会は中止しました。

野幌森林公園探鳥会

2004.10. 3　富　川　　徹

9月12日の探鳥会は、8日の台風18号によって風倒木が発生し、林内への立ち入りができず当会はじまって以来の初の中止となりました。集まった皆さんは担当幹事の言葉を耳にすると途方に暮れたように野幌を後にしたようです。この巨大台風は50年前の洞爺丸台風（昭和29年9月）に匹敵するといわれ、各地に多大な被害を与えましたが、野幌へのダメージも大きいといえます。倒木被害は、とくにトドマツ人工林やシラカンバにおいて多く見受けられ、探鳥コースではエゾユズリハコースから四季美コースに至る林道付近で最も顕著のようです（写真参照）。

この時期の探鳥会というと、紅葉の始まりの景観ウォッチングに加えて、ルリビタキの可愛い姿やツグミ類の上空飛翔と鳴き声チェック、そしてキツツキ類の目立ち様に期待がありますが、今回に関しては、さらに倒れた樹を観る会？を兼ねることにもなってしまいました。

結局、この日の鳥観は今ひとつでしたが、その理由としては台風や地球温暖化の影響が考えられるかも知れません。同幹事の松原さんと「昨年は19種、クマゲラ、オオタカも出たね。特にキツツキではオオアカゲラが出ればグランドスラムだったよね…。」などと少し羨ましい会話も弾んでしまいました。

林内は巨木の倒木などにより、営巣・ねぐら・休息の場として鳥獣に必要なうろや隙間などが減り、明るく見晴らしのよい環境に変わったところも認められます。自然のいたずら？の後遺症は、現存する生物にどのくらい影響を与えるか計り知れません。今は、少し長い目でみるとしてできるだけ倒木を残してくれることを望みつつ、フクロウやクマゲラなどのより棲みよい森によみがえってくれることを願っています。

〒069－0835　江別市文京台南町47－31

【記録された鳥】コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ウグイス、キビタキ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガ

ラ、ゴジュウカラ、メジロ、アオジ、イカル、シメ、カケス、ハシボソガラス　以上　16種

【参加者】赤沼礼子、石田典也、今村三枝子、大賀　浩、岡田幹夫、勝見輝夫・真知子、苅部栄一、後藤義民、斉藤正雄、佐々木裕、笹森繁明、四垂義治、品川睦生、島田芳郎・陽子、高林和宏・智子、辻田捷紀、徳田恵美、戸津高保、富川　徹、浪田良三、早坂泰夫、原　美保、辺見敦子、松原寛直・敏子、真壁スズ子、宮崎嵩司、守下憲治、山口和夫、山本和昭　以上　33名

【担当幹事】富川　徹

宮島沼探鳥会

2004.10.10

【記録された鳥】カイツブリ、ハジロカイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、オオタカ、ノスリ、ハヤブサ、ミサゴ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、カリガネ、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、カモメ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ　以上　27種

【参加者】板田孝弘、今村美恵子、岩崎孝博、岸谷美恵子、栗林宏三、後藤義民、小西芙美枝、佐藤幸典、佐藤ひろみ、島田芳郎・陽子、白鳥洋子、高栗　勇、高橋良直、武田由里子・雄太、道場　優・信子、中正憲佶、浪田良三・典子、成澤里美、橋爪陽子、畑　正輔、樋口孝城・陽子、船尾恭子、松原寛直、松山　潤、山口和夫、山田甚一、山本和昭、吉田慶子、横山加奈子　以上　34名

【担当幹事】佐藤幸典、佐藤ひろみ

東京からの初参加

2004.10.17　藤　本　真由実

10月17日、野幌森林公園の探鳥会に初めて参加させて頂きました。

私は東京在中のバードウォッチング3年目の初心者なのですが、今回札幌に遊びに行くことになり、折角の機会な

ので北海道の野鳥も見てみたいなぁと思い、札幌で開催される探鳥会をインターネットで検索していたところ北海道野鳥愛護会のホームページを発見しまして今回の探鳥会の事を知りました。ＨＰで昨年10月の探鳥会での観察記録を拝見させて頂きましたら、「クマゲラ」「キクイタダキ」の名前が上がっていてどちらも見てみたい鳥でしたのでわくわくしながら当日を迎えました。

この公園は札幌の繁華街からそれほど遠くない場所にあるので市民の憩いの半人工的な公園かと思っていたのですが、そこは石狩平野をうっそうと覆っていた森の面影を残す原生林でした。巨大な木々にびっくりしたのもつかの間、すぐにアカゲラが現れて、その大きさにまた驚き、数メートル先にオオアカゲラも現れ、あまりの大きさに息を飲みました。その後、だれかが「ハシブトがいる」と言ったのですが「北海道ではハシブトガラスが珍しいのかな？」と思いつつ双眼鏡でのぞくとコガラとよく似たハシブトガラという北海道にしかいない鳥でした。森の中を歩いていくと杉が根元から大量に倒れていて空がぽっかりと見える広い空間が現れました。「？」と思いましたら、皆さんが口々に「この前の台風の被害だね」と話されているのが聞こえ、この空間が台風によって倒された杉林によって出来たものだということがわかり、自然の驚異を感じました。（公園を管理している方が危険なのでわざと伐採した杉もありましたが）

途中、アカゲラの風切り羽を拾った方に羽を見せて頂いたのですが、白地に黒い水玉模様でおしゃれな感じでした。

クマゲラが皮を全部剥いでしまったという枯木も教えて頂きました。

残念ながらお目当てのクマゲラやキクイタダキには会えませんでしたが、初めて見た鳥や秋になる植物の実を教えて頂けたり、北海道ならではの動植物のお話を聞かせて頂けてすごく楽しかったです。気軽な気持ちで参加させていただいたのですが、北海道の自然のスケールの大きさを野鳥を通してとても感じました。

そして、私の趣味に付き合って一緒に参加してくれたパラグアイ（南米の国）から留学中のいとこもとても楽しんでくれた様です。

探鳥会を開催して下さった会の方々、親切にして下さった市民の皆様、大変お世話になりました。北海道旅行の楽しい思い出となりました。本当にどうもありがとうございました。

〒192－0045　東京都八王子市大和田町４－32－４

【記録された鳥】トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、イカル、シメ、ハシブトガラス　以上　17種

【参加者】石川勝祥、石田典也、井上公雄、今村三枝子、恵川和子、岡田幹夫、岡部良雄、尾崎　修、鹿川明美、苅部栄一、河端正晴・満寿美、河野美智子、玉田克巳、戸津高保、成澤里美、韮澤千代、野坂英三、畑　正輔、原　冴子、早坂泰夫、菱谷紀久子、広木朋子、藤本真由実、三浦とも子、柳川　巌、山口和夫、横山加奈子、横田飛鳥、渡辺文高・美枝子　以上　31名

【担当幹事】早坂泰夫、岡田幹夫

【小樽港】　2005年１月23日(日)

小樽港周辺で見られる海鳥を観察する野鳥の会小樽支部と合同の探鳥会です。オオハム、ホオジロガモ、コオリガモ、ウミガラスなどのほか、カモメ類や猛きん類も良く観察されます。日和山燈台付近、祝津漁港、小樽埠頭などの各観察ポイントを貸切りバスで移動しながらの探鳥会です。

なお、バスを利用しますので申込み制となります。

集　合＝午前９時30分　ＪＲ小樽駅待合室

申込先＝白澤昌彦宅　**011－563－5158**

午後６時～８時までにお願いします。

締切り＝１月16日(日)まで

参加費＝**1,000円～1,500円**程度の予定です。当日受付時にお納めください。

【野幌森林公園】　2005年２月６日(日)

冬の最も厳しい季節の中でカラ類やキツツキ類などの留鳥が活動しています。冬鳥として渡ってきたマヒワ、アトリなどと共にクマゲラやフクロウも見られるかもしれません。

集　合＝午前９時　大沢口駐車場入口

交　通＝夕鉄バス（文京通西行）　大沢口入り口下車

ＪＲバス（文京台循環線）　文京台南町下車

各徒歩５分

【円山公園】　2005年３月６日(日)

陽ざしに春が感じられる季節です。ツグミ、ウソ、アトリなどの冬鳥と共に、キクイタダキやカラ類などが見られるでしょう。午前中で解散の予定です。

集　合＝午前９時　円山公園管理事務所前

交　通＝地下鉄東西線　円山公園下車　徒歩８分

【ウトナイ湖】　2005年３月27日(日)

本州などで冬を過ごしたガン、カモ、ハクチョウ類がこの時期群をなして北の繁殖地を目指し、渡りはじめます。ウトナイ湖はこれらの渡りの中継地となっています。この他カモメ類やオオワシ、オジロワシなども観察されます。

集　合＝午前９時30分　鳥獣保護センター前駐車場

交　通＝道南バス　ウトナイレイクランド下車

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をお持ち下さい。
☆何れの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。
☆探鳥会の問い合わせは
011－563－5158　白澤さん宅

鳥民だより

☆☆☆ 会員名簿 ☆☆☆

【新しく会員になられた方】

岡部　良雄　〒003－0022
札幌市白石区南郷通16丁目南1－2－1406
稲村　勇一　〒062－0923
札幌市豊平区平岸2条8丁目2－6－305
河野美智子　〒069－0841
江別市大麻元町164－42
宮崎　嵩司　〒060－0053
札幌市中央区南3条東3丁目 パシフィック1106
中野　喜陽　〒059－0906
白老町本町1－1－30
白鳥　恵子　〒077－0002
留萌市塩見町70－8
伴野　俊夫　〒059－0015
登別市新町4丁目1－28
濱野由美子　〒004－0012
札幌市厚別区もみじ台南1丁目14－6

◇新年講演会のご案内

・日　時：平成17年1月15日（土）　13：00～16：30
・場　所：札幌エルプラザ内
札幌市男女共同参画センター　4階大研修室
札幌市北区北8条西3丁目
・演　題：オロロン鳥からのＳＯＳ
・講　師：小野宏治氏

1968（昭和43）年4月18日東京生まれ、36歳。東邦大学大学院で6年間、伊豆諸島や宮崎県門川町枇榔島をフィールドに、カンムリウミスズメの調査研究を行ってこられました。1997年4月、北海道海鳥センターの開館と同時に勤務し（羽幌町農林水産課自然環境係技師）、2004年9月末日退職。2004年10月1日、環境省自然環境局羽幌自然保護官事務所の自然保護官として新規採用され、ひきつづき北海道海鳥センターに勤務しておられます。パシフィックシーバードグループ日本海鳥保護委員会委員長、日本海鳥グループ事務局長、日本鳥学会鳥類保護委員会委員などもされておられます。

要　旨：ウミガラスは、かつて道東や道南でも繁殖していましたが、いまや道北の天売島が国内最後の繁殖地となりました。それも、この70年の間に40,000万羽から10数羽にまで激減し、2004年はついに繁殖成功つがいがゼロという、危機的な状況です。天売島ウミガラス保護増殖計画、通称『オロロンプロジェクト』の紹介を通して、日本の海鳥がおかれている現状と課題について見つめます。

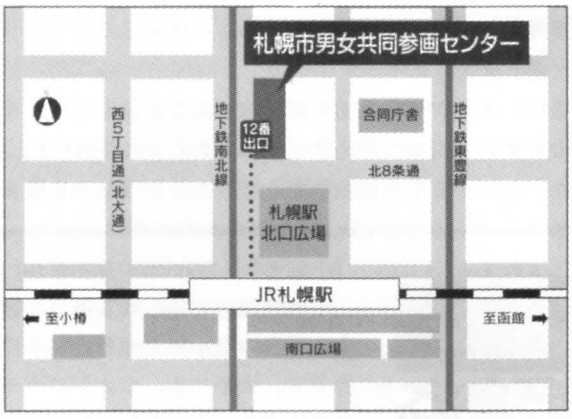
・野鳥写真映写

皆さんの持ち寄った野鳥写真を映写します。たくさんの作品の参加をお待ちしています。

スライドに加え、デジタルカメラで撮影した写真の映写も出来ます。画像を保存したＣＤ（Windows対応）を御持参下さい。ＣＤに保存できない場合は、高橋良直さん（BRB32264@nifty.com）宛メールで、添付ファイルとして数日前までに送っておいて下さい。

・会　費　500円

講演会場案内図



（お越しの際は公共交通機関をご利用ください）

・交通機関
●ＪＲ札幌駅北口より徒歩3分
●地下鉄南北線札幌駅より徒歩7分
（公共地下歩道で札幌駅12番出口から建物内まで直通）

◇写真展の作品を募集します

平成17年度も野鳥写真展を開催します。場所は光映堂フォトギャラリー（札幌市中央区大通西3丁目）で、5月の予定です。詳細は次号でお知らせします。

〔北海道野鳥愛護会〕　年会費　個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）　郵便振替 02710－5－18287
〒060－0003　札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階　北海道自然保護協会気付　☎（011）251－5465
HPのアドレス　http://homepage2. nifty. com/aigokai/